

小山清著

『国語科教育理論と実践 十一・十二』

国語科授業実践に携わる者に必須の教材研究参考書としての定評を得ている本シリーズも、数えて十二となった。

今紹介するのは、近刊十一と十二である。十一が「教育実習の手引き」(57)と(62)、「教材の扱い方と授業の実際」(79)と(87)。十二がそれぞれ(63)と(66)、

(88)と(98)というこれまでの刊から継続された論考と、様々な機会に公にされたもの、それをまとめ直された論考とが収められていることは、既刊とほぼ同じ構成である。

ここに所載された実践記録、教材分析試案等は、言うまでもなく実践の初学者にとっては、明日の授業を成立させる頼みの糧となりうる、正に「構造的」な発問と板書展開の明確な示唆によって支えられた優れたものばかりである。

さてしかし、今回特に指摘しておきたいことは、実はそうした明日の授業に汲々として本書を開くにはあらゆる眼で眺めるべきところである。すなわち二書にわたって所載されている「紅梅の誓い」(第一部・第二部)である。これは、広大学附属高等平成元年度入学生の学年担任を三箇年つとめられた著者が、その間「学年通信」に掲載した文章、ホームルーム等での談話記録を集めて卒業式に配布したものを、その遺漏を補って再録したものである。この記

録に目を通すと、文章は無論、生徒を前にした一年の折々の談話の豊かさ、巧みさ、畢竟国語教師としての力量の卓抜さには改めて心服させられるところである。この記録を眼にし、また著者の授業実践での「お話し」のひそかな重要性に思いを馳せるとき、実は、著者の評価著しい実践力の実体は、盛んに注目されているような「板書」を核とした「お話し」によって切り開かれていく国語教室の極めてナイーヴな営為に支えられているのではあるまいかと思えた。そう思うとき、著者の授業案に勇気づけられてそれを下敷きにした(私などの)つたない授業が、それでも何とかな形になっていくとき、何かしら心に授業に対する一抹の手応えのなさを感じるのは、こうした日々形作られた国語教室とその背後の周到で深い水準の教材分析を欠いているからなのではないだろうか。著者の提案は極めて明快で説得力がある。しかし著者の優れた実践を享受する前に、そこから真に学ぼうとすれば、我々のなすべきことは多いと考えられる。

(A5判、各二〇三ページ、一九九三年六月二〇日、

一九九四年一月二〇日、私家版、頒価各一〇〇〇円)

(住田 勝)